二〇二三年

三重若菜会会報

1．昇級・昇段者

昇級・昇段	氏名＊学年は昇級時	時期・大会
A級・四段	正木　真由子	３月桑名
	村井　彩夏　（大４）	３月桑名
B級・三段	山田　侑佳	２月三重県
	内山　采音　（高２）	10 月ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ
C級・二段	日比野　太星　（大３）	２月三重県
	髙橋　茉央　（高２）	10 月ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ
D級・初段	石垣　孝介　（高１）	10 月ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ
	松浦　香菜子　（高１）	10 月ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ
	石垣　慶士　（高１）	12 月初段認定
	岡本　将英　（大４）	12 月初段認定
	五藤　歩果　（大１）	12 月初段認定
	富永　洋雅　（大４）	12 月初段認定
	西　彩良　（高１）	12 月初段認定
	西　理那　（中１）	12 月初段認定
	古屋　琢人　（大１）	12 月初段認定
	三宅　由夏　（大１）	12 月初段認定

二〇二三年三月に開催されました桑名大会にて村井彩夏さんが優勝、正木真由子さんが準優勝し、三年連続で新たなA級選手が誕生しました。おめでとうございます。

2. 個人戦大会入賞者

A級	【三位】	太田　智絵	（３月桑名）
	【三位】	太田　智絵	（４月兵庫）
	【四位】	太田　崚友	（４月兵庫）
	【四位】	太田　智絵	（５月大垣）
	【四位】	桐嶺　真琴	（５月大垣）
	【四位】	太田　智絵	(12 月信州)
B級	【優勝】	村井　彩夏	（３月桑名）
	【準優勝】	正木　真由子	（３月桑名）
	【準優勝】	村井　彩夏	（５月大垣）
	【三位】	諸岡　和奏	（３月桑名）
	【三位】	植村　涼寧	（３月桑名）
	【三位】	植村　涼寧	（５月大垣）
	【四位】	諸岡　和奏	（５月大垣）
	【四位】	植田　清美	（５月大垣）
C級	【四位】	水谷　菜々花	（５月大垣）
	【四位】	村上　ともみ	（８月大阪）
	【四位】	村上　ともみ	(12 月愛知)

（以下、昇級者の内、五名から寄稿いただきました所感です。）

A級に昇段して

久居かるた会　村井　彩夏

二〇二三年三月に開催された第八十回全国競技かるた桑名大会で優勝することができ、A級に昇級しました。

四月から社会人ということもあり、これまで通りの練習ができなくなるだろうと感じていた私は、今までの大会よりも気合が入っていました。初戦は気合が空回りして、思うように取れない札も多くありました。三回戦目が始まる直前、武居先生に「村井さんなら普通にやれば勝てるよ」とおっしゃっていただき、ここから決勝戦まで、お手つきをして焦った時の自分を落ち着かせるための貴重な言葉となりました。

私は大垣大会でB級準優勝をしていたため、決勝進出時点でA級が確定していましたが、試合直前に太田会長に叱咤激励をいただき、最後まで気を抜かずに試合に挑むことができました。

二〇二四年四月で、競技かるたは六年目になります。桑名大会でのお二人からの言葉はもちろんのこと、一人ではA級になることはできなかったと心の底から思います。多くの方と試合をさせていただき、多くの方に相談をさせていただき、悩み、考えて練習をしたからこそ今があると強く思います。今後はより、かるたを極めていくことはもちろんですが、これまで練習会や大会でご指導いただいた皆様、運営として支えてくださった皆様にも恩返しをしていきたいと思います。これからもよろしくお願いいたします。

A級になって思うこと

桑名若菜会　正木　真由子

この度、桑名若菜会一〇〇周年記念 第八〇回全国競技かるた桑名大会で二回目のB級準優勝をし、A級に昇級することができました。B級での苦節九年を経て、自分なりに思うところをお伝えしたいと思います。

私が競技かるたを始めたのは大学一回生の四月でした。大学内のサークルがきっかけでした。同期と切磋琢

磨で練習に励み、六月の関西新人戦で三位をいただくことができました。周りからは次のD級大会で入賞できるかもしれないと期待されていました。しかし、二度大会に挑戦するも、いずれも対戦相手が同級とは思えないほど強くて昇級はできませんでした。練習で勝てても、昇級するには普段の練習相手よりも強い、格上レベルの相手に勝てる実力が必要だと学びました。そこからは、格上の選手と積極的に対戦する機会を作り速さを磨き、札直の正確性を高めるために一人のときも払い練習を欠かさず行いました。そうして、格上選手にも負けない実力をつけて自信を持てた十一月、長崎大会D級で優勝しC級昇格、翌々週の岡山大会C級で三位となりB級二段に昇格しました。さらに、二月の東大阪大会で三位となり、かるたを始めて一年経たずにB級三段に昇格しました。しかし、その後は思うようにいかず、八年間で二十回以上の入賞を経験しますが、A級昇級は叶いませんでした。B級で入賞できる実力となり、練習ではA級選手に勝てる日が増え、自分にとって何が足りないのかがわからなくなっていました。

その心境のまま、結婚を機に三重若菜会に移籍することになりました。移籍して初めての大垣大会で準優勝できました。勝因は自分でもわからず、まぐれだと思いました。ただ、苦しいだけになっていたB級の世界でようやく一つ駒を進められた喜びがありました。

私含め、関西の選手はいわゆる「攻めがるた」が取り柄です。攻め取って流れを掴み、勢いに乗る選手が多いと思います。対して、三重県の選手は冷静で攻守のバランスが良い綺麗なかるたをする印象があります。移籍してからの一年間は三重の選手に習い、攻守のバランスを意識して練習しました。具体的には、攻めの際に手を出しすぎず自陣にも正確に戻れるように、一音目での手の出し方を意識しました。ただ、それができるようになってきても、大会では結果を残せませんでした。

そんな中、桑名大会で準優勝し昇級できたのは、大会直前の練習でA級選手と対戦した際に頂いた二つのアドバイスがきっかけになっています。一つ目は、「分が悪くても迷わず普通に取ったらいいんじゃない。攻めるなら攻める、守るなら守る。」と指摘されたことです。攻めと守りのバランスを気にして思い切った取りができていなかったのを自覚しました。と同時に、戦況によって攻めるか守るかを迷わずに判断するのは難しいとも感じました。二つ目は、大学の後輩から「もっとガン攻め

の方が先輩に合っていると思います。」と言われたことでした。その時にハッとしました。自分らしいかるたをしていないから大会で自信がなく、思い切った取りができなくなっているのだと感じました。そして、次の桑名大会では「どんな結果であっても絶対に自分の攻めがるたをする」と決めました。

そう決めて挑んだ桑名大会では順調に勝ち進めることができました。特に、昇級を決めた準決勝の試合は私の競技人生の中で一番強い私でした。試合中は某漫画のように「誰も息をしないでほしい、今なら全部の札を取れる、早く次の札が読まれてほしい」と本気で思っていました。

どうやったらA級になれるのか、今思えば単純な話だったなと思います。何級であっても昇級するには格上レベルの相手に勝てる実力をつけて、自分のかるたに自信を持つことが必要なのだと思います。練習で自分に足りないスキルを磨いて、スキルがついたら大会で自分らしいかるたを発揮できるよう自信を持つことが大切なのだと思います。それに気づくことができて、三重に移籍してよかったと心から思います。ご指導いただいた方々、応援してくださった方々、本当にありがとうございました。

次の目標はA級入賞と五段取得です。また、国文祭で三重の主力選手として活躍したいですし、まだ出られていないタイトル戦や各会対抗団体戦に出場するなど、やりたいことはたくさんあります。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

昇級して

桑名若菜会　日比野　太星

昇級を決めた要因は、粘り強く戦い抜くことができたからである。初戦から、決勝戦まであきらめず戦い抜くことができたことが良かった。特に、準決勝では枚数差が少なくなってからリードされた場面があり、非常に苦しい展開だった。しかし、最後まであきらめず粘り強く戦ったことで勝利を収めることができた。D級の時は、枚数差が少なくなってからリードされてしまうと気持ちの切り替えができず、負けてしまうことが多かった。しかし、昇級を決めた大会では、負けている展開でもあきらめることなく、戦うことができた。準決勝以外の試

合でも、一枚一枚あきらめることなく、粘り強く試合を行うことができた。

自分のかるたの強みは粘り強さである。試合中、苦しい展開になることが多くあるが、それでもあきらめず戦うことができる。そのようにあきらめず粘り強く試合ができる理由は、練習から一枚一枚を大切にして試合をしているからである。練習試合をしていても、うまくいく試合ばかりではない。練習の時にうまくいかない時こそ、あきらめず、状況を打開できる力が身につくように意識している。昇級の話にもつながるが、練習から一枚一枚を大切にし、劣勢をはねのける力がつくよう意識して取り組んでいることが大会での結果にもつながっている。

大学生活も終わり、就職したため、かるたをできる時間は減ってしまっている。だからこそ、一試合、一枚を大切にしてかるたをしたい。

継続は力なり

暁学園かるた部　髙橋　茉央

私が大会で優勝できた理由は、今までの積み重ねにあると思います。私は五年以上競技かるたを続けていますが、二段に昇段するまでに二年半かかりました。何度も大会で負け、昇段戦でも二度負けるなど悔しい思いをしてきました。そういう悔しい経験をたくさん重ねて日々の練習に励み、その結果大会で優勝できたと思います。そして今までの積み重ねが、強い相手にも通用することを証明するために昇段を決めました。

私のかるたの強みは、後半の粘りです。私はもともと耳が特別良いわけでもなく、暗記が特別早いわけでもありません。なのでかるたを始めたばかりの頃は自分の長所が見つけられず苦労しました。そんな時かるたの先生が、君は根性がすごいねと言ってくれました。当時は初めて長所を見つけて喜んでいただけの私でしたが、その言葉を信じ練習し続け今の後半の粘りにつなげることができたと思います。

また私は高校で競技かるた部の部長を務めています。私の目標は、七月の全国高等学校選手権大会の団体戦に三重県代表として出場することです。その目標を達成するため、日々練習したり後輩を指導したりしています。練習を重ねるにつれ、目標にはまだ遠いと、自分では後輩を指導するには力不足だと思うことがよくあります。

しかしその度に、先生や周りの友達、卒業した先輩などたくさんの人がアドバイスや励ましの言葉をくれます。笑って全国大会に行けるためにも、今支えてくれているたくさんの人に恩返しをするためにも、今までの積み重ねを信じ、絶対に全国大会への切符を手にします。

継続は力なり。

初段を取得して

皇學館大学競技かるた部　三宅　由夏

私が昇段を決めた要因は、集中力であると考えました。今まで、札が読まれる直前まで暗記を回していて、読まれる前の息を吸うタイミングで、音を聞く準備を整え、音を聞いていましたが、読まれる前の余韻の部分で聞く準備を整え、一音目をしっかり聞きました。また、札の暗記方法も少し変えました。初段認定大会の前までは、読まれた札に関連している札(二枚札が詠まれたら、その場にある二枚札の位置を確認)してから、相手陣を左下段から順番に見ていくことをしていました。しかし、その相手陣を見る時に、例えば、田子の浦という札を見たら、た行の札の位置を全て確認してから、次の札というふうにしてみました。暗記の回数が増え、慣れてくると、速度も上がるため、暗記が今までより出来るようになりました。

自分のかるたの強みは、反射神経が良いことです。

普段の練習で心がけていることは、お手つきをしないことです。自分は聞こえた音に反応した後、その勢いが止まらず、お手つきをしてしまうことが多々ありました。自陣でしてしまうこともありました。そのため、詠まれた後その札が合っているか目で確認していないことに気づいたため、しっかり目で確認をしてから札を触ることを意識してやっています。後、暗記をもっと回せるように、試行錯誤しています。

大会を通して、私には体力がないことがわかりました。一試合目が終わると、暗記が入ってこなくなり、三試合目には、相手陣に飛び出していく体力もありません。そのため、長時間の試合に慣れるための体力が必要と考えました。

まだ、お手つきも多いですし、札流しも一分を切れていません。そして、札の並べ方も決して良いものでもありません。このままではいつか、全く勝てない日々が続

くかもしれないと思ってしまっています。そうならないために、暗記、お手つきを少しでも上達させたいです。

3．団体戦の記録

成　績	参加選手	時期･場所	大会名
暁高が三重県代表として出場 Ｆブロック１回戦 １勝４敗　敗退 （対：宮城第一高）	植村　涼寧 山田　侑佳 田中　悠也 水谷　菜々花 渡邉　璃奈 髙橋　茉央 潮田　佳純 小島　はるな	７月、 近江 神宮	**高校 選手権**
予選リーグ Ｊブロック０勝２敗 （予選敗退） 対石川　０勝５敗 対奈良　１勝４敗	植村　涼寧 山田　侑佳 田中　悠也 内山　采音 渡邉　璃奈 髙橋　茉央 伊藤　翼 小島　はるな	８月、 鹿児島	**高校総合 文化祭**
予選リーグ Ｂブロック０勝３敗 （予選敗退） 対福岡　０勝５敗 対京都　０勝５敗 対石川　０勝５敗	中川　華恵 村木　万有理 山田　明奈 中辻　初菜 笹之内妃音 庄村　慈 村松　美音	８月、 東京	**中学生 選手権**
対山口　１勝２敗 対広島　２勝１敗 対奈良　１勝２敗	太田　富夫 中村　久美子 松岡　貴子	10 月、 愛媛	**ねんりん ピック**
対東京　１勝２敗 対群馬　２勝１敗 対宮城　０勝３敗	中西　明子 岩名　幸一 中島　礼子		

予選リーグ Ｅブロック２勝１敗 対青森　４勝１敗 対岐阜　５勝０敗 対群馬　２勝３敗 決勝トーナメント 対大分　４勝１敗 対福岡　０勝５敗 ベスト８（初）	太田　智絵 佐竹　寛 桐嶺　真琴 正木　真由子 太田　崚友 村井　彩夏 久　　知嗣	11 月、 石川	**国民 文化祭**

いしかわ百万石国民文化祭に参加して

桑名若菜会　太田　崚友

「二〇二三年十一月、石川県で開催された国民文化祭において、三重県チームは初のベスト８に輝きました！」

このことはすごいことなのか？国文祭とは？多分この文章を読んでいる方の半分くらいはそのように感じているのではないかなと思います。そこで、今回国文祭についての会報の寄稿依頼を村上さんよりいただいたこともあり、国文祭とは何か、印象に残った試合についてなど今回の国文祭について書かせていただこうと思います。

○国民文化祭とは？

国文祭（国民文化祭）とは、「文化の国体」とも呼ばれ、演劇、能楽、美術、食など多種多様な項目について全国から集まった愛好者が発表する文化の祭典です。調べたところ、一九八六年に第一回が東京都で開催され、以降、都道府県持ち回りで開催されています。競技かるたについては、二〇〇四年に福岡県で開催された第十九回の「とびうめ国文祭」が最初で、「小倉百人一首かるた競技全国大会」として、都道府県対抗団体戦の形式で開催され、それ以降現在に至っています。（我々かるた関係者が「国文祭」と言っているのは、正式には「国民文化祭・小倉百人一首競技かるた全国大会」ですが、面倒なので、以下「国文祭」とします。）当初は参加チームも少なかったようですが、競技かるたの広まりを受け、最近では全国すべての都道府県や海外チームも参加して盛り上がっています。また、出場選手資格も、最初のうちはかなり怪しい人もいたようですが、最近ではルールが整備され、その都道府県の出身者または在住・在学・在勤している人が対象です。

団体戦と言えば、中学生選手権、高校選手権、高総文祭、大学選手権、職域が有名ですが、国文祭は、性別はもちろん、年齢、職業を問わず各都道府県で選抜

された代表選手が都道府県の名誉を背負って日本一を目指す、言わば団体戦の中での最高峰の大会です。大会形式は、二日制の大会となっていて、参加チームが四チーム（一部三チーム）のブロックに分かれます。概ね一日目が予選リーグ、二日目が決勝トーナメントで、予選リーグで各ブロック一位と二位の上位のチーム、合計十六チームが二日目の決勝トーナメントに進みます。コロナの影響もあり、異なるときもありましたが、基本的に一チーム五人の団体戦です。

これまでの説明でレベルの高い大会であることはおわかりいただけたかと思いますが、実際のところ、どれくらいレベルが高いのか？決勝トーナメントに進出するようなチームは、ほとんどＡ級選手で構成され、特に優勝を目指すようなチームはＡ級優勝経験者が数多くいる、といった感じです。

○今回の国文祭の印象に残った試合

今回の国文祭で僕が印象に残った試合は予選リーグ三試合目の群馬戦です。今回の国文祭で三重県チームは、青森、岐阜、群馬と同じリーグに入りました。三重を含めた四チームの戦力を客観的に見ると、一番強いと思われるのは群馬。群馬は主将、副将ともにＡ級優勝を複数回している選手、他の選手も少なくともＡ級にて入賞経験のある選手ばかりでした。三重としては決勝トーナメント進出のためには群馬が一番の強敵となるといえました。

一試合目の対青森戦では四勝一敗、岐阜戦では五勝とリーグ内では非常に良い流れになりました。

そして三試合目の対群馬戦。三重で出場する選手は、正木さん、村井さん、太田智絵さん、佐竹さん（慶應）、そして僕の五人。Ａ級での入賞経験などを考えると、智絵さん、佐竹さん、僕で三本を獲りたいというところでした。そして実際のカードは次の通り。

①正木 - 田中（四将）
②村井 - 鹿田（六将）
③太田崚 - 齋藤（主将）
④太田智 - 高橋義（三将）
⑤佐竹 - 髙橋虹（副将）

相手はＡ級で活躍している選手ばかりで当然すべての対戦は厳しい当たりですが、特に獲りたい佐竹さん

と僕の相手がＡ級優勝経験ある超強豪選手、厳しい試合になる雰囲気が漂いました。そして試合が始まりました。

序盤から、①②③は押され気味、④⑤は五分といった流れになりました。僕の相手の齋藤さん、試合するのは初めてでしたが、やはりすごく強い。特に自陣はとんでもなく固い。齋藤さん陣はなかなか抜けず、要所要所でこちらの陣は抜いてくるし、こちらのミスもあり序盤からあっという間に６～７枚差ほどつけられてしまいました。

中盤に差し掛かり、①正木さんはかなり厳しい状況、②村井さん、③僕もなかなか差が縮まらず劣勢、④智絵さん、⑤佐竹さんは五分近い状況でした。②③のどちらかでもっと食らいつければワンチャンスあるかもしれない。必死でくらいつこうと試合に集中しました。

中盤から終盤にかけて、①正木さんが敗れ、続いて健闘するも②村井さんも敗れました。残りは③僕が４枚ほどビハインド、④智絵さんはほぼ五分、⑤はごくわずかに佐竹さんビハインドの形勢。このまま三人が終盤にもつれ込ませればもしかしたら勝機があるかもしれない。そんな気持ちで終盤に臨みました。

しかし⑤髙橋さんの終盤力、そして佐竹さんのお手付きもあいまって佐竹さんが８枚差で負け。この時点で群馬に敗北が決まってしまいました。

しかし、③④で二勝をもぎ取れればリーグでの勝数は11。10ではもしかしたら厳しいかもしれないが11であればリーグ二位通過、決勝トーナメントに進出できる可能性はかなり高くなる。④智絵さんはどんな状況でもきっと勝ってくれる。佐竹さんが負けた瞬間に僕は自分の試合のみに集中して全力を出すことに専念しました。

最終盤、齋藤３枚 - 太田崚５枚。なんとか２枚差まで詰めるも、いまだに追いつけない。齋藤陣　右下段に三字の「ながら」、左中段に「こぬ」、「たれ」。太田崚陣　右上段（浮き）に「おと」、右下段に「む」、「あは（ぢ）」、「たち」、左下段に「さ」。読まれたのは「たき」。「たれ」に反応し、自陣の「たち」に戻るも避ける。

次に読まれたのは「あは（ぢ）」。手が若干浮き、下に入られて齋藤さんに抜かれる。相手陣で強く意識していた「こぬ」を送られる。「こぬ」を左上段に浮かし、浮かしていた「おと」を左下段に下げる。齋藤２-太田崚５。

次に読まれたのは「む」。全力で自陣をキープ。齋藤２-太田崚４。

次に読まれたのは「ながか」。両者齋藤陣「ながら」に向かい、避ける。

次に読まれたのは「おと」。出る予感がしていたのもあり、全力でキープ。齋藤さんの手もすんでのところまで来ており、ギリギリの一枚でした。齋藤２-太田崚３。

そして「たれ」。この試合を決定づけた一枚。齋藤さん陣左中段の「たれ」を抜く。自分で言うのもあれですが、自陣「たち」と聞き分けたこの一枚は会場で一番速かったのではと思います。自陣左上段に浮かしていた「こぬ」を送り返す。齋藤２-太田崚２。そして読まれた「こぬ」。「たれ」と同様に齋藤陣左中段を抜く。「さ」を送る。齋藤２-太田崚１。

次は「さ」、守られる。齋藤１-太田崚１。齋藤陣「な（がら）」、太田崚陣「た（ち）」の運命戦。

最後の一枚、読まれたのは「た（ち）」。自陣をキープし、相手、審判、読手に礼をし、つぶやく。

「三重二勝。」

信じていた通り智絵さんも勝ってくれていたこともあり、三重はリーグで勝数は11となりました。試合が終わり、応援してくれていた桐嶺さんや久くん、会長とも合流し、他の県の勝数を計算しても勝数11あればリーグを二位通過できることが確実でした。

そして翌日の決勝トーナメントに進出。決勝トーナメントでは大分に勝利し、福岡に敗北して三重としては初のベスト８で敗退となりました。

〇さいごに

今回の国文祭について、チームとしては初のベスト８、僕個人としても自分のベストの試合が行えたので非常に嬉しく、そして満足のいく大会となりました。

三重も決勝トーナメント進出が六回目、実力がついてきていると思います。
しかし、ベスト８といっても福岡戦では手も足も出ず完敗、トップレベルの県とはまだまだ大きな差があることも痛感しました。
　僕が初めて国文祭に出場したのは中学三年生のときのおかやま国文祭で、当時はまだＢ級でした。八将で参加して、一試合だけ出させてもらってボコボコにされた記憶があります。国文祭はもちろん県代表選手としてその自覚を持って試合を臨まなくてはなりませんが、普段では決して試合することのできない超一流選手とも試合できる貴重な機会でもあります。今の三重では昔に比べてもＢ級選手も増え、Ａ級選手も増えてきました。中学生、高校生、大学生と若い選手もどんどん増えてきています。みなさん積極的に国文祭のメンバーになって、一緒に三重県代表として戦いましょう。今度はベスト８以上を目指して！

三重県初のベスト８進出！

久居かるた会　久　知嗣

　国民文化祭・いしかわ百万石文化祭二〇二三では三重県初のベスト８に進出することができました。
　僕が一番印象深いのは決勝トーナメント初戦の大分戦です。大分戦は勝てばベスト８、個人的には大分の主将の楠木早紀永世クイーンと試合ができるチャンスと思い、前日から楽しみにしていました。結果的に楠木永世クイーンは出場しませんでしたが、その分副将と対戦することになった僕が粘ってついていけば、十分三勝できるチャンスはあるのではないかと思っていました。
　試合は中盤で太田智絵さん、崚友さんが勝ちペースになったことで、あと三人で一勝すればいいと考えました。ただ三人とも若干押され気味だったため、なんとか一勝するために僕は残り20枚前後から隣の佐竹さんとの札合わせを意識し始めました。今思えば、札合わせを意識することによって、自分の中で狙いが明確になり、余計なことを考えずに札に集中できたことがよかったと思います。

二勝一敗となって残り４枚セイムから佐竹さんと僕が二人とも敵陣を抜き、札合わせが完成しました。左右に分けるか右に固めるか迷いましたが、佐竹さんが固めたのを見て、僕も右に固め自陣の札を死守することに決めました。その後１-３になり、自陣の「もろ」だけを取ると決めました。今になって思えば、敵陣の三枚を取りにいけば取れたかもしれませんが、もし自陣を抜かれて負ければ折角完成させた札分けが無駄になると思い、敵陣を取るという考えは全くありませんでした。そのまま二組運命戦にもつれ込み、最後の一枚に「もろ」が読まれ、勝つことができました。結果四勝一敗で大分に勝ち、初のベスト８に進出することができて本当に嬉しかったです。

ただ次の試合では力が出せず、序盤から劣勢の展開になってしまい、チームの流れも悪くしてしまったと感じました。格上の相手ではありましたが、せめて中盤まで互角の展開に持ち込めていればチームとしての流れも変わっていたはずなので、反省点の多い試合でした。

今回三重県初のベスト８に進出することができましたが、他県との実力差も感じ、自分自身もっと強くなっていかなければならないと思いました。来年以降は国文祭ベスト４以上を目指してまた頑張っていきます。

発行日　二〇二四年十一月二日
発行　三重若菜会
発行責任者　村上　智洋